

池の改修・蓮をかたどる泉

裏山の紋り水が溜まって自然に出来ていた池を改修。中の烏を無くして水面を岩屋の足元一杯まで広げた。北の縁は大きな真鶴石を崩れに積み、石の間には水辺の草を配して力強さと自然な気配とを計っている。

ロビーに連続した露台と池との接点に設けた泉は彫刻家・中村真木氏（庫裏中庭の彫刻「生々世々」時の壺」の作者でもある）による。イタリア・カラーラ産の白い大理石から湧き出た泉水は、波紋を広げながら池の水へ、蓮の花へとつながる。

芦野石のさざ波と実生の黒松

ツツジの雲海の流れは庫裏に沿って寄せ返す波に姿を変える。波に見立てて据えた石は、那須近くの芦野でとれる安山岩で、芦野石と呼ばれている。通常切り出しサイズは三尺の定尺となるが、今回は波の伸びやかさを表すために、切り出しをする白井石材に特別に長いものをお願いした。また削って現れた割肌と切り出した割目をそのままにしたものを取り混ぜて配して波のうねりを表した。

縁に立つ黒松は、もともと岩崖の下に実生で育ったものでしたが、この位置に移したことで、その姿その枝振り共に伸びやかに見え、得難い景色を作りだしてくれた。

岩崖と洞窟

その高さ、その長さ、岩肌の重なり。岩崖

は自然の造形美である。池水に姿を写すその静かな迫力には、この庭の大きな特徴といえる。岩面にうがたれた洞窟のいくつかは、寺の建立よりも古いとされる。その中の一番大きな洞窟は、堆積した土を取り芦野石を敷いたところに、陶芸家・藤原郁三氏による陶製の邪鬼「一念鬼」が据わり、灯のともる時その姿が池水に映える。

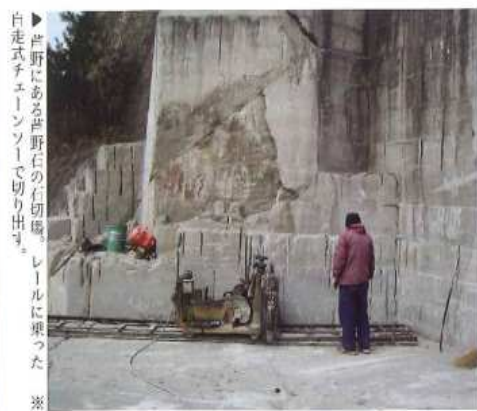
新本堂正面の松

本堂の正面に何を植えるか。春の彼岸に彩りを添える花木はどうか、サクラは、カイドウはと、堂々巡りであった。姿、大きさ、力強くしかも品格を持つもの。そんな悩みの中から、たどり着いたものが黒松であった。古米松は、格式高く日本の伝統を象徴する樹木でもあり、本堂正面にふさわしい。

しかし昨今の松はほとんどが屋木に仕立てられ自然な力強さが足りない。あちらの山、こちらの畑と、聞き回って探した。いま正面にしっくりと据わっている松は、九十九里浜近く、畑のあぜ道にぼつりと、木、絵に描いたように立っていたものである。時と共に、その力強く自然な姿が本堂にふさわしいものになる予感があった。

植込みに際しては、その吊り上げから位置決めまで、とても慎重を期するものだと思わため知った。重心は定めにいく、やわらかな木肌は剥がれやすい。姿には裏表がある。樹木を据える助と手際に一日には成らない職人の技があった。

※印刷撮影：箱根植木



▶芦野にある芦野石の石切場。レールに乗った白走式チェーンソーで切り出す。



▶石を敷き込む。平らな面。割肌の面タマリエウを削るも部分を組み合わせている。



▶カット。式側面は平らになり、底面は割肌になる。壺の石の大きさは定尺サイズだが、もつと長さが欲しいので特別に長いものを切り出してもらうことになった。



▶大きな洞窟の中の埋積土を取り除き石を敷く。



▶洞窟の中に邪鬼「一念鬼」が据わった。本堂からは東門の方向にある。



▶九十九里浜の近くにたまたまんでいた黒松



▶クレーンで吊り上げて植え込む



▶芦野石の建なりを波に見立てている

▶露台の先に据えられた水盤。カラーラ産の大増石で蓮の花をイメージした。



▶正面左側には小振りな黒松を植込んだ